

【生きる場所（集団移住）】

教師志望の学生には、教師でいいのか、どういう教師になりたいかよく問いかけるが、最近は何（どこで）働き、生きたいかを優先的に考えてほしいと話している。

自治体によって、採用試験への対策がかなりちがうこともあるが、（どこで）を考えることで、教師像なども一気に具体性が増し、その準備で学生時代についておくことが明確になってくる。

生活する場所の問題は、東京集中・極点社会化など、全国的な人口流動の問題、ひいては社会や国のありかたにつながってくる。

大きく歴史にとらえると、日本は、集団移住がいろいろな形でひんぱんにおこなわれている流動的な社会である。

北海道は、近代の人口移動について考えなければならぬことをたくさん提供してくれる重要な場所、服部が一九五二年に北海道に行った際の紀行文（文献①）にあるように、近代は東北旧「賊」藩の士族による開拓、犯罪者や思想的犯罪者の「利用」、炭坑などの開発に伴う人口集中、官営企業払い下げによる工場への人口集中がある。ほぼ全国からの移住があり、「内地」とは、親戚の親戚ぐらいで北海道とつながりが

生活教育 キーワード

ありそうである。文献①の時代の後、高度経済成長やグローバル化の中で、人口の減少、流出が課題になってくる。それぞれの時期において、先住民族であるアイヌとの関係が、新しい意味をもつて問題になっている。

近代の前だと、信長の時代では、前田利家に加賀（石川）へ、加藤清正が肥後（熊本）へ行くなど、尾張名古屋出身の家臣が全国に集団移住する。江戸時代では、国替えによる集団移住が行われた。

そこに暮らしていた人々に、移住してきた人が次々混じってくる。ここに支配や敵対関係ではなく、前にいた地域と新しいつながりを生んで活かしあうような関係づくりが（地域に根ざす）課題のひとつと考えられる。

（研究部・加藤聡一）

参考文献

- ① 服部之總（しそ）「望郷―北海道初行脚」（改造）初出時は「さいはての地を往く―北海道初行脚」。『青空文庫』http://www.aozora.gr.jp/cards/001263/files/50370_40671.html
- ② 谷川彰英『名古屋地名の由来を歩く』（ベスト新書）KKベストセラーズ、二〇一一年。
- ③ 柄谷行人『遊動論 柳田国男と山人』（文春新書）文藝春秋、二〇一四年。